生えちゃってますね
あたし達♪
PUELLA MAGI
MADOKA MAGICA
KYOKO&SAYAKA FANBOOK
杏さやふたなり合同誌
energia
meets Lucky
R-18
FOR ADULT ONLY
成人向

energia meets Lucky

ENERGIA MEETS LUCKY PRESENTS
PUELLA MAGI MADOKA MAGICA
KYOKO&SAYAKA FAN BOOK.

ぐみちょこ／H'／ほなみ／黒雲鵠／さわめき／鍵屋
／謎のザコ／足田／Katzeh／びかち／きもお妙

Attention!
この本は
杏子とさやかの
ふたなり本です
※禁複製・禁アップロード
※18歳未満の方は読んではいけません。

04-13 ぐみちょこ
14-23 黒雲禍
24-33 H'
34-37 ほなみ
38-45 Katzeh
48-55 謎のザコ
56-61 足田
62-70 鍵屋
72-85 ざわめき
86-103 ひのかち
104-117 きもおやじ
118 Carmine

＼はえてる！／

ぐみちょこ

図書室
さーやーか！
ちらっ
ちらっ
え？杏子？
？
バッ
う、うわ！
な、なに…
な！さやか！あのな！
さやかにお願いがあるんだっ
こんなになっちゃったら…やることは一つだよな！
どーん
!!??
ばっっ
えっ
えっ
ガタッ
これ…

折角だしさ
えっちしようぜ

は?!

わな
わな

あんたここ図書室だよ!!!
ああもう隠して//

大丈夫だよ他に
誰もいないじゃん

もうちょっと
場所をわきまえろって言ってんのー!

あ…

も~

そ、そうか…
なるほど…

!

ちょ、ちょっと
杏子…
まずいって…

ナンダヨー
今更引き返せないだろっ

さやかだって脱ぐの
嫌がらなかったじゃん?

そ、それは…

あたしはもう我慢
できないんだけど

も~バレても
知らないからね

あう

ぎゅ

杏子は

すっごい濡れてる

い、いちいち見せなくていいってばー!!!!

私の気持ち全部分かってるのに聞くからずるい…

わっ

すっ

とろ…

でも

そんな大きい声出すと外まで聞こえるぞ？

こうしている時も私のこと大事にしてくれて…

優しくって…

んっ…うあぁ…

ズプ…

ぐぷ

ば、ばかきょうこ…

大好きだなぁ…って

あっ

あっ

あぁっ

ビク

くちゅ

ビク

私だって…

わ、わたしもする…

さ、さや…
あ、あう…
ビクッ
どーん♡
えへへー
!?
ずっ…
ん
ぷっ
ぷっ
あっ
あ、あっ
さやかぁ…そこはだめ…
杏子きもちい？
あっ
さやかぁ…
ビクッ
あっ
ちゅ
ちゅぱ
ぷは

ごめん
もう我慢できないや…

ドン

きょ、
杏子…？

ぐっ

ギシ

あっ♡

ギシ

あっ

きょうこぉ…♡

ひあああっ
きょうこおっ

ズッ

ズッ

くぷ

あっ
ああ…

あ、

あっ

さやか…
も、もう…

あっ♡

しるっ

うん
一緒に…

ちゅぱ

ビクッ
ビクッ
んっ
あう
あ
ギュッ
キョーニおお
あ――っ♡
ギュッ
ドキドキ
さゃかかわいかった
さゃかわいかった…
きゅーん♡
あっ!!!!
?
ぎゅっ
シーツすごい
汚れてる…
えっ
END☆

ぐみちょこ ●七色ぱーかー http://93choco.net/

黒雲禍

杏さや路地裏バトル！
作:黒雲鵺

ハッ

ちょっとアンタ、卵産む前の鶏シメてどうすんのさ

弱い人間を魔女が強姦す。その魔女をアタシたちが強姦す

これが当たり前のルールでしょ、そういう強さの順番なんだから

な…！

あ、あんたは…っ！

※注・この漫画の魔法少女はち○ぽを武器に魔女を倒す設定です。

あっ
なっ
あっ
ひ♡
やっ
ちょ
やめ♡

…ふん、トーシロが。ちっとは亀頭冷やせっての早すぎだし

ドクッ

ビュー

ビュー

！

あっ♡おっ♡

ガッ

！

フラフラッ

…おっかしいなぁ、3日は勃たないくらいにはかましてやったんだけどなぁ？

彼女は癒しの祈りを契約にして魔法少女になったからね

精力の回復力は人一倍だ

ビキッ

誰が…あんたなんかに。あんたみたいな奴がいるから、マミさんは…!!

ササッ

もじ

もじ

うぜぇ…

超うぜぇ！

ドン

ドガッ
ドガッ
ドガッ

チャラチャラシコってんじゃねぇよウスノロっ♥

ぐぽっ♥

ずぽっ♥

ハムっ♥

ビュルルルル

ビュルルルル

んごっ♥

んぶっ♥

ゴキュッ♥

ゴクッ♥

ドピュッ♥

ぐぽっ♥

ビュルルルル

ビュルルルル

ビクビクッ

ゴルッ♥

ぐぽ

キッ

…言って聞かせてわからねえ、

シコってもわからねえバカとなりゃあ…

ストストッ

後は強姦しちゃうしかないよねッ!?❤

んぐぐっ

ビクンッ♡

ちゅっ♡

ぶちっ

ぶるっ♡

うあっ♡
い、イッたばかりだから敏感に…っ❤
じゅぷ♡
ずぽっ♡
ズッ♡
ズプッ♡
おぉ♡
あっ♡
ズポッ
ズポッ♡
くっ
おっ、終わりだよっ❤
それには及ばないわ

ミシミシッ
ミシミシッ
カシャッ
なっ
おっ
!?!?
えっ
あっ
ドーン
バシャーン
タッ
バシャ
終わる

杏さやふたなり合同なのにほむらオチですいませんでしt

どうも黒雲鵺です。
個人誌で「ふたなり魔法少女が擬人化魔女をち〇こで倒す」というイミフなシリーズを描いているんですが、
今回は杏さやふたなり合同という事でそっちで
描かなかった番外編を描かせて頂きました。
5話の会話をアホな内容に置換したかっただけでs

今回はお誘い頂きありがとうございました!

黒雲鵺 ●Atelier:Dew http://www.pixiv.net/member.php?id=10478

H′

…きょうこー

お？どうしたー？

な、なんだよ…

…きょ

杏子ってさ…か、かわいいよね…

は？

ちょっ!?
えっ
ちょっ!?
ちゅー
んっ!
むぅ!?

ば…馬鹿!
何考えんだ
おて前!!
ドキドキ

じ…実は…

すろ。

魔法でこれ生やしたら…

なんだか杏子が可愛く見えてきちゃって

こいつ生えてるじゃねえか!!

そういうわけでちょっとだけ！ちょっとだけ!!

わけがわからない！

大丈夫！ちょっと見るだけ!!

ちょっと触るだけだから!!

何が大じょ

あーっ!

ばかばか！ばかすばか!!

くぱぁ
やっ いいかげんに あっ

杏子可愛いなあ…
はぁ はぁ
ドキドキ
しゅっ ぐちゅ
あっあっ
でもそろそろやめてあげないとかわいそう…かな？

いい…いいかへん…ひ…ひろ…ほんぉひおこゆょぉ
ぽろ ぽろ

こんなにえろかわいい杏子が悪い！
しゃ…しゃわゆはへって

ぐぅ
あ…ああぁ
がくがく
ぶるぶる
みちみち
プチ
ブチ
きょ、杏子のなか
はぁ
はぁ
はぁ
ぬるぬるで
きつきつで
あったかくて
気持よすぎだよぉ
はぁ
はぁ
ふぇ？

んっ♥
ぬるぬるに搾られてるみたいっ
しゃやかぁ
いたっ
やめぉ
あっ♥
杏子のなかよすぎてもうだめっ！
あっ♥
あっ
あっ♥
ぢゅぽ
ぱちゅっ
ぶぢゅ

ふぁっ♥

びくっ

あっあっ

あっ…

じゅぷ

じゅぷ

はぁ

はぁ

ぞくぞく

う…

どくどく

あたしって…
ほんとバカ…

…なにやってんだろ…
もう馬鹿すぎて…
あやまって済むような
ことじゃないけど…
杏子…ほんとごめん…

い…いやさ
ほら、そ、そこまで
気にしてないって
だからもう
元気だせよ
ここまで
落ち込まれると
怒りたくても
怒れない
じゃねえかよ…

しくしく
……

泣きたいのは
はこっちだ…

H' ●即H http://www.pixiv.net/member.php?id=2527603

ほなみ

さやかちゃんに生えました。

ほなみ

もうやだ
こんな
気持ち悪いの…

こんなんじゃ
もうお嫁にも
いけないじゃ
ないぃ…

じ

じゃあ
その時は

あ

あたしが
もらって
やるよ

あぁ
あぁ

え…

はいそうですか
ってあげられる
なら最初から
生やしてないわよ！

ってい
なんで
あたしにだけ
こんなの
生えるのよ！

キーン

ガバッ

もーー
知らーー

え？

なんで
いきなり
キレてんの？

ほなみ ●ヨツクロ http://4296.blog79.fc2.com/

Katzeh

大したことない魔女だったねぇ

あれ少し怪我してるじゃない杏子 治すよ

おっと…わるいね

ぱあっ

さやか…いいにおい…

ぴきぴきぴきぴき

しっぽ!

ひくんっ

ぎゃあああっ

ぶるぶるぶるぶる

“あくまのしっぽ”” Katzeh

えっ?なに?尻尾…!?これって…!

はー

はー

ひくっ

ひくっ

は…

な…コレ…っ尻尾っつーか…っ!

君達の生存種族維持本能が常に危機に身を置くことによって潜在意識下で高まりに高まり本来交尾不可能でありながら自分に相応しいと考える対象に直接的に生殖するための形を具現化しその肉体を歪めていく魔法として顕在化したとしても驚くにはあたらないというかその生え方はなんだこのカマトトめ…!もっと下品なのが本当は好きなんだろう君達はわかっているんだぞこの下劣な種族めわけがわからないよやりなおせばかまってだく君達ときたら大切なときにかぎってこんなとんでもない愚図をやらかして僕達の

男の人の…
…だよね…

ぬるぬる…

ぬるぬる

ぬるぬる

ぬるぬる

やっ…勝手に…っ
はぁ…
はぁ…
……杏子あたしとしたいんだ…？
ずっと一緒に戦ってくれたんだもん…
…杏子になら別にいーよ……
ぶぶ♡
ぬちゃ
ぬちゃ
ぬちゃ

なっ…なにさぁっ…！

あんただってこんなにしてえ…っ！

ぴくぴくっ

ぴくんっ

ぴくっ

ぴくっ

ぴく

ドンッ
ドンッ
ドンッ

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

ぎゅぎゅ

ぎゅぎゅ

ぎゅぎゅ

Katzeh ●FelisOvum http://katzeh.fur.bz/

＼はえてるっ／

謎のザコ

足田

鍵屋

「え？　風邪？」
「うん。さやかちゃん、そう言ってたよ」
その日の朝、まどか達が普段通る通学路に顔を出した杏子は、目的の青い髪の少女を見つける事が出来なかった。その理由を彼女の親友に尋ねてみた所、どうやら季節外れの風邪だという話だった。
「全くしょうがないヤツだな。何とかは風邪引かないんじゃなかったのか？」
「あはは……それはちょっと違うと思うな、杏子ちゃん……」
杏子の呆れた様な台詞に、思わず苦笑いをするまどか。
「……仕方ないねぇ。せっかくだから冷やかしにでも行ってやるか。間の抜けた寝顔でも見てきてやるよ」
「うん、杏子ちゃん。さやかちゃんのお見舞い、よろしくね？」
「な――いや、そんな、見舞いじゃねーって。あたしはただ……」
「きっとさやかちゃんの事だから、初めは意地張っちゃうかもしれないけど……杏子ちゃんの事話してるさやかちゃん、いつも楽しそうだもの。きっと、喜んでくれるよ？」
まどかに上目遣いで見上げられ、杏子はやれやれと息を吐いた。さやかもきっと、まどかのこんな仕草に弱いんだろうなと思いながら、杏子はまどかの頭をくしゃりと撫でる。
「分かったよ。土産の一つでもせしめて帰ってくるからさ。ま、気長に待っててくれよな」
「うん。がんばってね、杏子ちゃん」
まどかの声援を背に受け、杏子は振り返らずに手を振る。そして、目的のさやかの家へと足を運んだ。

「おーい、さやかー」
コンコンとさやかの部屋の窓を叩く杏子。しかし、中からの反応は無い。不思議に思った杏子が少し窓を強めに叩くと、カーテンが少しだけ開いて、そこから少し暗い顔をしたさやかが顔を覗かせていた。
「……杏子？　どうしたの、こんな時間に」
「どうしたの、じゃねーよ。まどかの奴に、さやかが風邪引いたって聞いたからさ、見に来てやったんだよ」
決して『見舞いに来た』とは言わないものの、杏子の表情は今にもさやかが心配だと言いたそうな表情をしている。
「そんな、わざわざお見舞いに来なくても良かったのに。あんたにうつしちゃ、悪いでしょうが」
「何だよ、そんな事気にすんなって。あたしは人から風邪を貰うほどヤワじゃないよ」
しかし、当のさやか本人は、どうも杏子を部屋の中に入れたくない様子だった。ここまできて何もせずに帰りたくなかった杏子は、窓に手をかけて入れてくれる様、さやかに促す。
「だからさ、入れてくれよさやか。ほら、リンゴ持ってきたんだ。食べるだろ？」
「……いいわよ。そこ、置いといて。後でちゃんと食べるから」
「さやか……？」
取り付く島も無く、カーテンが音を立てて閉められる。呆気に取られる杏子だったが、やがて、このまま引き下がれるものかと行動を開始した。

「お邪魔しまーす」
小声で玄関のドアを開け、ゆっくりと家の中に入る。さやかは失念していた様だが、杏子は以前さやかに自分の家の合鍵を渡していたのだ。油断大敵だぜ、と呟いて、杏子はさやかの部屋まで向かう。そして、さやかの部屋のドアノブに手をかけた時――奇妙な声を聞いた。
「……っ……ぁっ――はっ……」
「……さやか？」
部屋の中から聞こえてくる、苦しそうなさやかの声。まさか、さやかの調子は自分が思っていたよりも悪いのではないか。嫌な予感がして、杏子は急いでドアを開ける。
「さやかっ！　大丈夫かっ!?」
「――えっ……？　あ、杏、子……!?」
「……え？　さや、か……？」
さやかの部屋に入り、杏子が最初に目にした光景。それは、パジャマをはだけさせて、自分の胸を揉みながら、その股間に備わっている――普通に考えて、少女には在り得ない筈の肉の器官――男性器を扱いているさやかの姿だった。
「……」
「――」
呆然と、二人は目を合わせる。その沈黙を破る様に、びゅる、と弧を描いて肉棒の先端から白濁液が噴き出していた。

「……それで？　軽く風邪を引いたからソウルジェム弄って身体強化で治そうとしたらちょっと加減を間違って、そしたらそんなモノが生えてきて、収まりがつかなかったから自分で慰めていた――と、こういう訳だな？」
「……」
風邪の熱ではない理由で、さやかは顔を真っ赤にしながら、自分の身におきた異変を杏子に白状した。そっけない態度で杏子を追い返そうとしたのも、今の自分の状態を見られたくなかったから、とも言った。
「……まあ、特別具合が悪いっていうんじゃなくて良かったな……けど」
「な、何よ……」
杏子は、一度さやかの身体を上から下まで眺めた後に、ぽつりと呟いた。
「……まさか、魔法でそんな事も出来るなんて思わなかったよ」
「あ……あたしだって、こんな事になるなんて思いもしなかったわよ！」
感心した様な、呆れた様な杏子の言葉に、さやかは大声で反論する。その股間には、未だに屹立した男性器があった。
「でさぁ……ソレ、いつ治る訳？」
「わ、分かんないわよ……とりあえず出せば収まるかなって思って、もう朝から何回もしてるのに……全然収まらないのよぉ……」
「ま、マジかよ……？」
「どうしよう、杏子……もしこのまま治らなかったら、あたしもう学校に行けないよ……」
涙目で、さやかは杏子に訴える。
「お、落ち着けよさやか……ソウルジェムが原因なら、それをどうにかすれば元に戻るんじゃないか？」
「……やってみたけど、駄目だった。逆に、どんどん元気になっちゃって……」
そう言って、さやかは股間に目を落とす。そこには、本人の意志などお構

い無しと言わんばかりに、肉棒が自己主張をしていた。
「う――やだ、ちょっと、あんまりじっくり見ないでよ、杏子……」
「あ、わ、悪い……でも……」
――おもむろに、杏子の手が伸びる。
「ひゃっ!? ちょ、ちょっと、何触ってんのよ……!?」
肉棒に杏子の手が触れる感触に、さやかの声が裏返った。一方の杏子は、肉棒を興味津々とばかりに見つめている。
「治し方が分かんねーなら……とりあえず枯れるまで出すしかないよな……」
「え、ちょ、あんた何変な事――んんっ!!」
くちゅ、と既に鈴口から零れ出していた粘液が、陰茎を握った杏子の指に絡みついて音を立てる。それを潤滑液に、杏子はさやかの肉棒を扱き始めた。
「きょ……こ……だめっ、やめてっ……ふあっ……!」
制止の声も、不意に背筋を駆け上る快感に途切れる。羞恥に震える喘ぎも、肉棒を更に硬直させるスパイスにしかならない。
「さやかの……すげぇ熱い……男のやつって、こうなるんだな……」
「っあっ……! それ以上、したらっ、ああっ……!」
さやかが身体を仰け反らせると同時に、肉棒の先端から勢い良く白濁液が飛び散る。その飛沫は杏子の顔面を白く染め、零れ落ちてシーツを汚した。
「うわっ……と、も、もう出たのかよ……」
「し、仕方ないでしょ……! 何だか知らないけど、すっごく敏感なんだから、コレ……!」
「で、それでも収まらない、か。なるほど……確かにこれは、厄介だな……」
杏子は自分の顔に付いた白濁を指ですくい、ぺろりと舐め取る。その仕草に、さやかは再び肉棒が反応し始めた事に気付いた。
「はっ……ん、もぉ、やぁ……」
射精した後の気だるさにも関わらず、じわりと身体中に拡がってゆく勃起の快感。それに、さやかの女の部分も反応してしまい、さやかは思わず身を震わせる。
「まだ足りないのか……? さやか……」
「えっ……や、そういう訳じゃ……」
その事を杏子に見透かされた様に感じて、さやかは顔を赤くしながら懸命に否定しようとした――が、その時、杏子の顔が鼻先まで迫っていて。
「さやか」
「んっ――!?」
その唇を奪われた。その次に、ぬるりとした感触。それが杏子の舌だと分かった時には、それはさやかの口内に蛇の様に侵入していた。
「ん、むぅ、ふうっ、んっ……!」
「んっ、ちゅっ、ちゅる……」
ゆっくりとベッドに押し倒されながら、さやかは杏子の舌を味わう。と、そこにどろりとした苦味のある感触。それが、杏子が舐め取った、自分の吐き出した白濁液だと気付くまで、しばらく時間がかかった。
「んぅ……んっ、んグ――」
「ふぅっ……ちゅ、ちゅぷ……」
口内を舐られ、唾液と精液のカクテルを口移しで飲まされる。普段なら経験出来ないであろうその行為に、さやかは身体が熱くなっていくのを感じた。
「……っぷぁ……き、杏子ぉ……」
「ンッ――はぁっ、さやか……」
濃密な口付けに、さやかの肉棒は痛い程に反応している。今まで必死に隠

そうとしてきたさやか自身の情欲も、抑え切れない程に疼いている。
「我慢すんなよ、さやか」
そんなさやかの状態を見透かすかの様な、杏子の言葉。
「あたしが全部受け止めてやるよ。どんな身体になっても、さやかはさやかだ」
「杏子……」
そう言って微笑んだ杏子は、自分の服を脱ぎ始める。さやかもそれに倣う様に、パジャマのボタンに手をかけた――

「んっ、んふっ、ちゅるっ、じゅぷっ……！」
「ふぁあっ！　あっ！　あぁんっ！　ひあっ……！」
じゅるじゅると音を立てて、さやかの肉棒に杏子の唇が吸い付く。舌先で亀頭を舐め、唇で陰茎を扱き、精を搾りつくさんとばかりにしゃぶりついている。
「んあっ、あぁっっーーー!!」
どくん、と杏子の口内で白濁液が爆ぜる。その勢いは一瞬で杏子の口内を満たし、唇の端から漏れ出す程。それを零すまいと、杏子は喉を鳴らして呑み込んでゆく。
「んぐっ……ふうっ――んふ――ン――」
息苦しさに、杏子が肉棒から唇を離す。幾度目の射精を終えてなお剛直を保つそれは、自らの放った白濁でどろどろに汚れていた。
「はあ……んくっ……あふぅ……」
口一杯に白濁を頬張り、呆けた様な顔で、杏子は精液を嚥下してゆく。その、普段は決して見る事が出来ないであろう杏子の表情に、さやかの劣情は刺激される。
「杏子っ……！」
「んっ、ふぐぅっ……!!」
呆然とする杏子の頭を押さえ、肉棒を咥えさせる。今度は自分から腰を振り、杏子の喉奥まで犯すように肉棒を突き挿れる。
「んっ！　んぐっ！　ふうぅっ……！」
「ああっ、杏子ぉっ！　すごいっ、気持ちいいよぉっ！」
杏子もまた、さやかの肉棒を受け止めようと唇で吸い付く。じゅぽっ、じゅるっ、と卑猥な音を立てながら、さやかは杏子の口内に何度も精を放った。
「んっ……さやかの……いっぱい……」
「はあっ……ああっ……杏子ぉ……」
口いっぱいに広がるさやかの精の臭気。汗だくになった杏子の身体から立ち上る少女の香り。それぞれのフェロモンに中てられた様に、二人は互いの身体を求め合う。
「さやか……来て……」
「杏子……いくよ……」
すっかり塗れそぼった秘唇を指で開き、杏子はさやかを誘う。断る理由など無く、さやかは杏子の入口に肉棒を宛がい、一息に突き挿れた
「――――ッッ!!」
「はぁっ……！　う、うぅっ……！」
乙女の聖域を掻き分けて、欲望の塊が侵入する。その衝撃に、杏子は声を引きつらせた。
「っあ、はあっ……杏子……平気……？」

「っ、く……少し、痛い、けど……こんなの、魔女との戦いに比べればなんて事無い、さ……」
「……そんな顔して、あんまり説得力無いよ？」
太股に流れ出た一筋の赤色を見て、さやかは杏子の目尻に浮かんだ涙を指でそっと拭う。その事を指摘された杏子は、顔を真っ赤にして俯いた。
「……ばか。あんまり、見るな」
「はいはい――それじゃ、動くからね」
我慢出来ない、と言わんばかりに脈動している肉棒を、さやかはゆっくりと動かし始める。ざらりとして、それでいて熱くぬめる様な感触の肉襞の刺激に、少しの抽送だけで達してしまいそうな快感が、さやかの全身を駆けた。
「あっ……くうっ……！」
「っうあっ……！　杏子の中、すご、いっ……！」
ぬちり、と肉の絡み合う音が身体の中で響く。もう、二人の性器はその意志を離れて本能だけで交じり合おうとしていた。
「やっ、だ……もうっ……！」
「ああっ、さやかあっ……！」
蠕動する膣肉の誘惑に耐え切れず、肉棒はその中に精を放った。抱きしめ合いながら二人は身体を震わせ、互いを受け止める。
「ああっ、あっ……ふぅ――」
「あぁんっ……熱、いぃ……」
下腹部に広がる熱を、杏子は恍惚とした表情で受け止める。と、身体に感じる重みが増えた様な気がして、さやかの身体を持ってみた。
「さやか？」
「……」
呼びかけてみても、その反応は無い。どうやら、何度も射精した影響か、軽く意識を失ってしまったようだ。
「まったく、しょうがないな……」
杏子はそう呟いてみるものの、その原因は手や口を使って散々搾り取ってきた自分にも責任はあると考え、さやかを責める事はしなかった。
「……しかし。どうするかな、これ」
一人ごちて、ベッドの周りを見渡す。そこは、さやかの撒き散らした白濁液やら何やらで、シーツやパジャマ、自分の服など色々と汚れていた。
流石にこれを放置するのはまずいだろう――杏子はそう考え、さやかの身体を抱きかかえると、ある場所に向かっていった。

「――ん……あれ……？」
温かい感触と、水の音でさやかはゆっくりと目を覚ます。まだ少しはっきりしない頭で周りを見渡すと、そこは見慣れた――自分の家のバスルームだった。
「お、起きたかねぼすけさん」
声のする方に目を向けると、自分の正面に立ってシャワーヘッドをこちらに向けている杏子の姿があった。シャワーヘッドからは温かいお湯が出て、さやかの身体の汚れを洗い流している。
「……あたし、どうして。なんで、ここに」
「ちょっと出しすぎたみたいだな。いきなり気絶するから、びっくりしたよ」
「あー……うん、そうだね……杏子の中、すごい気持ちよかった」
「そ――そうかい？　いや、何か、照れるって……ハハ」

さやかの言葉に、杏子は照れ臭そうに笑う。そして。
「じゃあ」
さやかの目の前に、『それ』を近付ける。
「あたしのも、良くしてくれるかい？」
「――へ？」
それを見て、さやかは目を丸くした。杏子の股間から生えているそれは、間違いなく自分から生えているモノと同じモノ。
「杏子……？　あんた、それ……何で……！」
「ちょっと加減が難しかったけどさ、何とか出来たよ。……これで、さやかと同じ、だな」
「でも……何で、わざわざそんな事……！」
杏子の行動に、さやかは疑問をぶつける。それに、杏子はこう答えた。
「……これでさやかと同じ身体になれたんだ。同情じゃない。さやかがあたしを抱いてくれた時、すごく幸せな気持ちになれたんだよ。……だから、あたしもさやかに同じ事したいって思った……もしかして、嫌だったか……？」
そう言って、さやかを抱きしめる。その優しげな声に、さやかは胸にこみ上げるものを感じて、杏子を抱きしめ返した。
「ばか……杏子、そんな事、そんな状態で言っても締まらないってば……」
苦笑するさやかの下腹部に当たる、杏子の滾った肉棒。それに気付いた杏子は、しまったという顔をする。
「あー……何だ、うん。さやかの気持ち、よく分かったよ。コレ、ほんとに収まんないもんなんだな……」
「でしょ？　だから……」
今度は、さやかの方から唇を奪う。

「二人で……一緒にしよ……？　杏子……」
その提案を、杏子が断れるはずも無かった。

「んっ、んむっ、ふぅんっ、ちゅっ……」
「はむっ、んうっ、ちゅるっ、くちゅっ……」
絡み合う舌と唾液の音が、バスルームに反響する。深い口付けを交わしながら、二人は腰を動かして、互いの肉棒同士を擦り合わせていた。
「あっ、んっ、くふっ、ちゅっ……」
「んあっ、ふぅんっ、ぴちゅっ、んんっ……」
ちゅぷ、ちゅぷ、と口端から零れる唾液が泡立つ音に、にちゃにちゃと鈴口から溢れる淫水の絡み合う音、くぐもった嬌声に、ぽたぽたと秘裂から垂れ落ちる蜜の音。潤んだ瞳で互いの蕩けた顔を見て、洗い流してもなお汗ばむ肌の匂い。柔らかく、熱い肌が触れ合う。互いの存在を全身で感じながら、二人は行為に没頭した。
「んーっ……ふあっ、じゅる……んっ……！」
「んくっ、ふうっ……ちゅぷ、ん、じゅっ……！」
二人は腰の動きを速めながら、肉棒同士で扱き合った。淫水にまみれた陰茎で擦り合い、鈴口でキスを交わす。裏筋を亀頭のかさで弄くる。やがて限界を迎えて噴出した白濁液をお腹で受け止め、更にそれをローションの様に互いの肌に塗り込んでゆく。
「あっ……さやか……さやかぁ……」
「んぁ……杏子……きょうこぉ……」
何度目かの射精で、腰が抜けた様に二人はバスマットの上にへたり込む。

が、それでもなお二人は離れる事を止めない。
「して……杏子ぉ……あたしにも、杏子のちょうだい……？」
「ああ……分かってるよ……さやかをあたしでいっぱいにしてやる……！」
ねだる様な声で、さやかは杏子の肉棒を自身の秘裂に宛がう。それを心待ちにしていた、とばかりに、杏子は遠慮無くさやかの中に腰を突き挿れた。
「ンッ、あっ――――!!」
「ああっ、さ、さやかぁっ……!!」
融けた肉襞の中にずるずると侵入する肉棒。それだけで射精したくなる程の刺激に、杏子は歯を食いしばって耐える。
「んっ……そんな、痛く、ないから……動いても大丈夫だよ、杏子……」
「いやっ……ちょっと、やばっ、さやかの中、気持ちよすぎて、これ以上動かしたら出ちゃうって……！」
「……いいよ、杏子。何回でも、あたしの中に出して……？」
「うっ……あっ、さやかっ……！」
「ふぅうっ……!!」
さやかの言葉をきっかけに、杏子の肉棒が弾ける。どくっ、どくっ、と力強い脈動に合わせて、さやかの膣内を白濁で満たしていった。
「あっ……すごい……杏子の……いっぱい……」
結合部から溢れる白濁に、僅かに混じる赤い色。さやかはそれを指で掬って、杏子の目の前に差し出して見せる。
「ほら……これが、あたしの初めてだよ？　こっちも、杏子にあげるね？」
「はあっ……あっ、さやかっ……んっ、ちゅぷ……」
精液を掬った指を、そっと杏子の口内へ差し入れる。それを受け入れる様に、杏子はさやかの指を丁寧に舐め回した。
「あはっ……杏子、可愛い……」
「んっ……変な事、言うなよ……ちゅるぅ……」
「美味しそうに指を舐めながらそんな事言っても、あまり説得力が無いわよ？」
「んっ……ぺろっ……だって、もったいない、だろ……」
「あっ、んっ……もう、杏子ったらぁ……」
さやかの指をしゃぶりながらも、杏子はさやかの身体を押し倒していった。つぅ、と唾液の橋を残して口を話すと、杏子は自分の肉棒がさやかの目の前に来る様に体勢を変えて、さやかの上に覆い被さる。
「一緒に――な、さやか……」
「……うん、分かった。杏子」
杏子が何を言わんとしているかを察したさやかは、目の前にぶらさがる杏子の肉棒を一息に頬張った。
「あふっ！　んん――」
同時に、自身の肉棒を包む温かい杏子の口内の感触。互いのモノを口に咥え、二人はそれを愛おしそうに吸い始めた。
「んっ……ふっ……ちゅるっ、じゅるっ……」
「ふぅっ……ぺろっ……じゅぷ、んっ、じゅ……」
口淫と同時に濡れそぼった秘唇を指で弄くる。とろとろと溢れる蜜を指で泡立てながら、男と女、二つの快感を同時に味わう。
「あふっ……！　んあっ、くちゅっ、んふぅっ……ふぅぅぅんっ……!!」
「ひふぅっ……！　ぷあっ、んぶっ、じゅるっ、くぅぅぅぅんっ……!!」
押し寄せる絶頂に、二人は堪らず肉棒を震わせ射精し、秘唇を戦慄かせて潮を噴く。顔を口内をどろどろに汚されても、二人はその行為に没頭してゆく。

「はひっ……ふあっ……ぁあぁぁ……」
「へ……ぁぁ……んぁあぁあぁぁ……」
ぽろぽろと歓喜の涙を流しながら、二人は互いの身体を味わい続けた——

「あっ、ああっ、杏子っ！　きょうこぉっ！」
「さやかっ！　さやかっ！　さやかぁっ……！」
ぱんっ、ぱんっ、と腰を打ち付ける音がバスルームに響く。後ろを向いて壁に手を付き、腰を突き出した形のさやかを、杏子は背後から突き続ける。一突きする度に、びゅる、びゅる、とさやかの肉棒から白濁液が噴出する。幾度と無く膣内に放出された白濁液が結合部からこぽこぽと溢れ、糸を引いていた。

「あーっ……！　いっ、さやかぁっ……！　きもちいいよぉっ……！」
「あたしもっ、杏子っ……また、でちゃうっ……！」
バスマットの上に寝転び、杏子を上から突き上げるさやか。アーチを描いて噴き出した杏子の白濁液を全身に浴びながら、さやかも負けじと杏子の膣内に射精する。

手で、口で、胸で、肉棒で、膣で——あらゆる場所を使い、二人は何度も慰め合い、達し合い、口付け合い、抱き合い、愛し合った。
「さやかっ……さやかぁっ——!!」
「杏子っ……きょうこぉっ——!!」
身体と意識が全て、真っ白に染め上げられる。その最後まで、二人は互いの名前を呼び続けた——

「……ねえ、杏子？」
「ん？　何ださやか」
それから。散々搾り尽してようやく収まりを見せた二人の肉棒だったが、完全に元の身体に戻る事は無かった。そして、あれだけの事をしたのだから当然だが、疲労困憊の二人は、同じベッドで眠る事にした。
「この身体……元に戻ると思う？」
「……さあね。また明日から色々調べてみるさ」
とりあえず、今は眠りたいんだとばかりに、杏子は布団を頭から被る。と、何かを思い出したかの様に急にその頭を出した。
「もし——二度と戻らなくても」
「え？」
「この身体のままでも、構わない。さやかと同じなら、それでいい」
「杏子……」
杏子の言葉を聞いたさやかは、布団の中で杏子に抱き付いた。
「……ありがと。杏子」
「気にすんなよ、さやか」
さやかの身体を、杏子が抱きしめ返す。伝わる互いの温もりが、疲れた身体に心地良い。
そっと目を閉じて、まどろみにたゆたう。この腕の中にある存在を決して離さないと誓いながら、二人は安らぎの中へと意識を落とした。

了

「さいしょはぐー！」
「じゃん、けん、ぽいっ！」
杏子とさやかは真剣な顔で睨み合う。ベッドに腰掛けた二人は談笑するでもなく、かといって眠りにつくわけでもない。辺りには張り詰めた空気が漂っていた。視線の先にはお互いの手、正確には指の形。
「あいこで、しょ！」
部屋に響く声。今にも魔獣を殺しかねないほどの鋭い目つき。幾千もの戦いの末鍛えられた、しかし少女の細い可憐な腕がふりあげられる。彼女たちの友人がこんな様子を見たら、何事かとすぐ止めに入るだろう。しかしいつもの喧嘩でも、本気で憎み争っているわけでもない。
なんてことはない。単に今夜はどちらが上か下になるかを、決めているだけだった。これはお互い譲らない杏子とさやかの、妥協に妥協を重ねた結果の平和的解決方法だった。
「っしゃー！」
そして勝負は一瞬で終わる。杏子はこぶしをかかげ天を仰いだ。その大げさな勝利を喜ぶポーズは、雪辱の三連敗からついに脱した証だった。
「長かったぁ……。あ、今日は生やすから」
言うが早いか行動が早いか。杏子は早速準備に取り掛かる。生やす。本来女性には備わっていないモノを、取り付けること。準備と言っても魔法を使うだけで、あとは時間がたてば男性器が生えてくる。なんとも便利なものだった。
「ちょいまち」
そんな杏子のすばやい行動を見て、さやかが慌てて止めに入る。
「あんたね……生やすとか聞いてないって」
「言ったじゃん、さっき。……まあまあさやかさ、よっと」

杏子は両手でなだめるような手つきをしたかと思うと、そのままさやかをベッドに倒した。突然ひっくり返されたさやかは目を丸くして抗議する。
「ちょ、なにすんのよ！」
「んーでも、さやかは負けたから。あたしの言うこと聞くべきじゃないの」
どこか勝ち誇った笑みを浮かべながら、杏子はさやかの上に乗しかかった。諦めたようにため息をつくさやか。だけどどこか頬が緩んでいるように見えるのは、きっと気のせいじゃない。ふたりの重みで、ベッドがぎしりと音を立てた。

気が付けばベッドに押し倒されたさやかは、あれよあれよという間に服を脱がされていた。初めてのときは見滝原の制服の構造に頭を抱え、半泣きで脱ぐよう頼んできたのに。ぼんやりと考えるさやかを尻目に、杏子は慣れた手つきで脱がせ終え、自身も下着姿になろうとしている。こんなことで時間の経過を実感するなんて、とさやかは頭を抱えたくなった。
「……なに考えてんの」
「なんだと思う？」
「どうせろくでもないことだろ…」
「うっわひど。じゃあ教えてあげない」
「べ、別に教えてほしくないし」
「あ、今はやりのツンデレってやつ？」
「……わけわかんねーよ」
杏子はため息をつくと、おしゃべりはここまでと言わんばかりに顔を寄せた。
「んっ」
杏子はさやかの唇をなぞるように舐め、軽く触れ合うだけの口づけをする。いつもの、始まる前の合図。たったそれだけで頭の中のスイッチが切り替わ

り、お互いのことしか考えられなくなる。杏子はさやかの口の隙間から舌を侵入させ、より一層深く口づけた。
「っぅ、」
ねじりこんだ舌は、口内を貪る。舌が絡め取られ、唾液をすすられた。さやかの中のすべてを持っていこうとする。舌を絡めあっていると、口の端からどちらのかわからない唾液がこぼれ落ちた。だけどそんなことを気にする余裕はない。
「んっ、ぁ」
「あ、ふぁ……」
喘ぐように息が荒い。くちゅくちゅした水音が部屋に響き、それがより一層お互いを興奮させた。唇を重ねたまま、杏子はさやかの体に触れる。頬に添えられていた手が徐々に下へ伸びていった。
「あっ、ん……！」
胸の敏感なところに触れたかと思うと、そっと離れて指先で円を描くようにくるくるとなでる。先端を指先でいじりながら、仰向けになっていてもそれなりに大きい乳房を揉みしだく。
ぷっくりと柔らかかった乳首は、次第につんと固くなる。その反応を楽しむように指で押しつぶし、口に含んで舌でころがした。
「……っ、んんっ！」
さやかは刺激に耐えられず、思わず声が漏れる。口からこぼれる嬌声は、触れられていない杏子の体も熱くさせる。
しっとりとして手に吸い付くような肌。柔らかくて、いいにおいがする。杏子は我慢できなくなって、口を大きく開けさやかの乳房にかぶりついた。
「あぁっ、んぁっ！」
音を立てて、強く吸う。唇を離すと、さやかの白い肌に赤い痕が残った。
「な、に…？」
「ううん、なんでも」
その印を見て、杏子は満足そうに微笑む。自分のものだと、おおっぴらに主張できる数少ない手段。見ているとほっとして、同時に少し切なくなった。
頭を振って、目の前のさやかに集中する。
杏子はさやかの張り詰めた乳首を強めにひっかいてつまんだ。少し乱暴なぐらいが、さやかにはちょうどよい。何回も体を重ねて学んできた。それに、今日はいつもよりいいみたいだから。敏感に反応するさやかをもっと楽しませたくて、乳首に歯を立てる。こりこりとした感覚を楽しみ、より一層強く吸う。
「あ、ぅううんっ！」
止まらない刺激にさやかはのけぞり跳ねた。断続的に体が痙攣する。
「あ、ぁあ、んんぁあああ！」
びくりと身体が大きく震え、ひときわ甲高い声が上がった。
「ぁ、ぁあ、ん……」
「さや、か……？」
「も、はぁ……やだぁ……」
「……もしかして、胸だけでイった？」
「あんた…ぅ、ぁ、言うなって……！」
「なんか、今日のさやかすごい、いやらしい……」
「はぁ？んなの、しら……んんっ」
文句を言われる前に、杏子はさやかのショーツに手を伸ばす。触れただけで、じっとりと濡れているのがわかる。軽く押すと、ぐちゅぐちゅといやらしい音が響いた。

「ひっ、……も、ぁ……！」
「うん、脱がす、ね……」
もはや役割を果たしていないショーツを、するすると脱がせていく。覆うものがなくなり、とろとろと愛液があふれ出た。それはさやかの体をつたい、シーツを重くさせる。
「あ、ぁ……」
濡れそぼった内側は愛液を垂れ流し、ひくひくと収縮を繰り返す。充血して、はやくはやくと求めている。
「はぁ、見ん、なっ……！」
まじまじと見る杏子を咎めるように、さやかは力の入っていないこぶしで杏子の背中をぽかぽかとたたいた。
「ご、ごめん……でも、かわいい……」
「う、ぅううう、もう、はやく……」
念のため、杏子は人差し指を口の中でしっかりと唾液に絡め濡らす。その間さえ待ち遠しいといわんばかりに、さやかは腰を擦りつけてくる。
「待って、……い、挿れるよ……」
涙と唾液によりくしゃくしゃになった顔でさやかは頷く。ゆっくりゆっくりと中へ侵入する。さやかの膣内は待ち望んだそれを悦ぶように締め上げた。
「う、あっ……！」
指を挿れると、杏子の体をぞくぞくとしたものが走った。もしこれが指ではなく自分に生えるモノだったら。考えるだけで頭がおかしくなりそうだ。同時に股間に感じる違和感。そろそろかもしれない。
「あっ！きょう、こ……！」
「はっ、ぁ……」
指の腹で押し上げ、前後にこする。

「うぁっ、はぁ、きょうこ、ぁあっ！」
さやかの甘えたような声が響く。きょうこ、きょうこと何度も繰り返す。
「きょう、んんっ……！」
指を曲げると、ぴったりと閉じていた膣内がぐちゃりといやらしい音を立てて開いた。中がほぐれてきたのが分かる。きっともう大丈夫だろう。
杏子が指を引き抜くと、べっとりとついた愛液が垂れ落ちた。自分の愛撫でここまで濡れている。喜びとわずかな征服感。頭の中がどろどろにとろけていく。　べとべとになった人差し指を見つめていると、ふと杏子のショーツを圧迫する存在に気付いた。こちらの準備も整ったようだ。
「もう、いい……？」
下着をおろすと、杏子の股間から魔法で生えた男性器がそそり立っていた。
「……ぁ、はぁ……うん、いいよ……」
期待とほんの少しの不安に瞳をうるわせ、さやかが求めてくる。少女の体には不釣り合いで、どこかグロテスクにも思える杏子のそれに優しく触れた。興奮して、もうすでに出ている透明の先走りの液体をさやかがすくう。
「すごい……」
その様子がとてもいやらしくて。いつものさやかではない、女を感じさせた。なにかが胸を締め付ける。こんなものをつけているせいか、それとも。不快な気分を振りはらうように、さやかの入り口にそれをあてがう。
「は、ぁっ……」
これからくるであろう衝撃を待ちわびるように、さやかの体がぶるりと震えた。その表情は普段よりもずっと美しくなまめかしく、ますます杏子の胸を苦しめる。勘違いかもしれない。だがふと場違いな考えを持った。
さやかは生やしてするときの方がいつもより楽しそうだ。反応がよく何度も達したり自分から触ったり、積極的な彼女が見られる。その行動はさやかが

求めているのは女同士ではなく、男だということを意味するのではないのか。そんなまさか。でも、最初からわかっていたはずだ。
だってさやかが魔法少女になったのは、あのぼうやのため。なのに今更。
「……さやかって、こっちが好きなのか」
「ん、ぇ……こっちって？」
「その、これがある方が」
言葉を濁した杏子は視線を自分の股間にあるモノへやる。
「やっぱり、さやかはさ」
男の方がいいのか、という言葉をすんでのところで飲み込む。認めたくなかった。声に出したら、すべてを失ってしまいそうな気がした。どうやっても性別はひっくりかえせない。こんな、魔法でも使ってごまかすしかない。どうあがいても、自分は少女のまま。
なかなか先へ進まない杏子に、焦らされているのかとさやかが顔を上げる。またあのいたずらっぽい顔で、変なことを考えているのでは。もしかしていやらしい言葉でも言わされるのか。
杏子の顔を覗き込む。しかし目にとびこんできたのは予想に反して、不安に押しつぶされそうな、迷子の子供みたいな姿の杏子だった。
「……きょうこ？どうしたの、」
「だって、だって、さやか楽しそう……」
杏子は乱暴に髪をかきむしる。自分で言ったこととはいえ無性に腹が立つ。さらにもとはと言えば、自分が気まぐれで生やしたことが原因だ。ぎゅっと下唇を噛んで、気を抜けば漏れてしまいそうな情けない声を押し殺した。
「楽しそうって、うーん。そうかなあ……」
「……やけに、積極的だし」
さやかは荒い息を整えながら思案する。さきほどまで自分を貪っていた恋人が、途端にしょんぼりと落ち込んでいる。急にどうして。原因は、なにか。もしかして、自分だろうか。多少うぬぼれているかもしれないけど、こうやって彼女の気持ちを左右させるのは、いつも自分だと思うから。熱に浮かされていた頭に喝を入れて考え込む。
「うーん。……強いて言うなら、って感じだけど」
しかし、単に謝っただけでは、こうなった杏子には伝わりそうにない。さやかは杏子の背中に回していた両腕をはずし、杏子の乱れた髪を直してやる。
「それがあったら、こうやって杏子の顔がちゃんと見えるし」
汗で濡れた頬を両手でぎゅっと挟んだ。今にも泣きそうなほどこわばっていた杏子の顔が、ぐにゃりとゆがめられる。
「な、なにひゅんだ」
「いいからいいから。それにね」
そのまま頬から顎を撫でおろし、這わすように首、肩、腕に触れ、最後にさやかの顔の横に置かれている杏子の手に重ねた。
「手が、つなげるよ」
ほらね、と杏子の指の間にさやかの指が入り込む。ぎゅっと絡まる手と手。不安に揺れる杏子の瞳が、はっと大きくなった。繋がれた指先からじわりと暖かいものが広がる。
「なんか安心するんだ。杏子が、ここにいるって実感できて」
「……んだよ、それ」
さやかの言葉がどうしようもなく杏子の胸を満たす。心にのしかかっていたものを取り除いてくれる。大丈夫だと、言ってくれるような気がした。自分の居場所はここにあるのだと、教えてくれたような気がした。
「ばか、ばか……さやかのあほ」
「そんな、目をうるうるさせて言っても迫力ないわよ」

「うるさい、ばか。ばかさやか」
「……はいはい、わかったから――あ」
急に固まったさやかを見て、どうしたのかと杏子はさやかの視線を追う。そこには、先ほどよりも大きさを増した立派なうんまい棒があった。
「……う、わー……」
「わー……」
「……なにか言いなさいよ」
「え、え、っと……ごめん？」
さっきまでべそをかいて半泣きだったのに。途端に嬉しそうな申し訳なさそうな、複雑な顔になる。
「う、う、……だいたい、さやかが悪い！」
「は？」
「さやかが今日に限ってすごくかわいいからいけないんだ！」
「な、なに言って……！」
「うるさいっ、ばか！さやかのばか！」
まだなにかを言おうとするさやかの口をふさぐ。そのまま腰を前に突き出して、入口から挿れようとする。
「……んっ！」
肉棒と秘所がこすれ合い、途端に切なげな声が漏れた。どちらも、中途半端なところで止まっていたのだ。求めているのは、お互い同じだった。大丈夫か、と杏子が目でうかがってくる。それにこたえるように、さやかは杏子の唇にかぶりついた。
その様子を確認してゆっくりと中へ侵入する。しっかりとほぐしてはいたが、それでも杏子しか知らないさやかの中は、異物をみっちりと締め押し返そうとする。
「あ、……中……すごっ……！」
「あ、んぁあっ！」
少しずつ奥へ奥へと入る。その間も内壁がぎゅうぎゅうに杏子の肉棒を締め付けた。その感覚だけで、達してしまいそうになる。何度もその甘い誘惑に負けそうになりながら、こつんと一番奥にぶつかった。
「さや、かぁ……はいっ、た……」
「んん、……ぅ、ん……」
息も絶え絶えに、言葉を交わす。少し動くだけでこらえきれないほどの刺激がやってくる。大きく息を吸って、今度は腰をゆっくりと引いた。押し返しながら、しかし繋ぎ止めようと圧迫する膣内の動きが、杏子の体を震わせる。
「うごく、ね……」
「んぅっ、ふ、ぁ」
緩やかな律動を始める。前後に動くと、体が全部溶けてしまいそうな感覚に陥った。ぬるぬると内壁が絡みついてくる。少しでも長くさやかを感じていたい。奥歯をぎゅっと噛み、快楽にのまれそうになるのをこらえた。
「はっ、はぁあっ！」
汗が、体液が、腰を打ち付けるたび体にはりつく。だけど不思議と嫌だとは思わなかった。むしろ感じているのは一緒なんだと、うれしく思えた。
繋がった体が、決して離れようとしない。さやかの手が、杏子の手が、お互いを痛いぐらいに握りしめる。大好きだ。愛しい。離したくない。ただ一心不乱に腰を打ち付ける。
どれくらい時間がたったのか。ふと、さやかの声が聞こえないことに気付いた。夢中になっていた動きを止めて、体を離す。もしかして、気絶していたなんてことはないだろうか。前科はある。心配になって、顔を覗き込んだ。
「……っ……ぅっ……！」

「さや、か…？」
シーツを噛んで、声が漏れるのを必死にこらえるさやかが目に映る。頬は染め上がりどことなく苦しそうである。
「ど、どうした？」
「あたま、へんになりそう、で……。きもちよすぎて、っ……！」
「へん……？」
「もう、むりぃ……やだぁ……！」
甘えたような声を出して、身体をすり寄せる。限界が近いのは、お互い様だった。こんな姿を見せられて、我慢しているわけにはいかない。
「あぁっ、さ、ぁ、ぁあっ、さや、かぁ……！」
杏子の腰の動きが速さを増す。杏子の動きに合わせるように、内壁が強く絡む。激しく打ち付けるたびに、愛液が泡立ってこぼれ出た。
ぎゅうぎゅうに締め付けられ、捉えて離さない。それがうれしい。きもちよくて切ないほどうれしかった。
「きょ、やぁっ、きょうこぉ、あっ、ぁああっ！」
「さやかっ、さやか……！」
「あっ、やぁ……、だめ、いっちゃ、だめぇっ……！」
「だいじょ、ぶ……ちゃんといるよ、はなさい、から……」
「きょ、こっ、ぁ、あ、」
「うん、ぜったい、つないだ手は、はなさないから……！」
失いたくない。この手を離したくない。自分にすがる姿がどこまでも愛おしい。収縮が、激しくなる。一番いいところに、思いっきり腰を突き上げた。
「あ、ぁあああああっ——！」
「ふ、ぁあああっ——！」
背をそらせ、身をよじりながらさやかは絶頂する。それに合わせるように、杏子はさやかの奥深くへすべてを吐き出した。
「……杏子、これなに？」
「え？あ、いやー……つい」
「ついってレベルじゃないでしょ！」
収まることのない情欲をぶつけ合いこれでもかというほど交わった後、杏子は起き上がったさやかに怒鳴られていた。理由はいたって簡単。さやかの体のいたるところに赤い痕が、杏子と愛し合った証拠がちりばめられていたからだ。
「あの、ほらさ。さやかはあたしのものだーって印が……う、ごめん」
「……なにそれ」
部屋に飾られた鏡を見ながら、さやかはぶちぶちと文句を言う。
「ほんと、どうしよ」
「……なんだよ、あたしのじゃ不満だっての？」
あまりにも責め続けるさやかに、かちんときた杏子が口をとがらせて反論する。杏子はベッドに丸まったまま、拗ねたようほっぺたをふくらませた。
「だから……こんな痕がなくったって、私は杏子の……だし」
「え？」
「……それに、あんた以外にさせるわけないっての」
「ちょ、なんて言ったのもう一回！」
「なにも言ってませんー」
ぱっと顔を上げる杏子を無視して、さやかは再び全身の痕を探す作業に戻る。体中に広がる赤い痕は、どこかつけた張本人を連想させた。その痕ひとつひとつに指先で触れる。杏子がさやかを求めた証。緩みそうな頬と赤くなる体を悟られないように、杏子から顔をそむけた。
舞い上がった気持ちを静めるには、もう少し時間がかかりそうだった。

ぬちゃり、くちゃり。
部屋中に、粘っこい水音が響く。
「さやかっ、さやかっ！」
「あっ……んぁぁっ！」
杏子の声が、あたしの眼前で響く。艶を帯びた声が、何度もあたしを呼ぶ。その度に気持ちが高まって、熱が体の中に溜まって、今にも内側から破裂してしまいそうになって。
「いいか？　いいか、さやか!?」
「ああっ、ん、うんっ……!!」
切羽詰まった問いかけに、あたしは問いかけられてる理由も内容もよく分からずに返事をする。
擦り合わせた部分がヌルヌル滑って、一番敏感なところ同士がぶつかって、痺れるような熱さが股から背筋を駆け上がって、頭を痺れさせる。
「イクぞ、イクぞ、イクぞっ、イクぞっ、イクぞっ、いくっ、いっ!!」
「〜〜〜!!」
杏子の背中が仰け反る。同時に、あたしの目の前も真っ白になった。

「だああぁぁぁぁっ！　悔しい悔しいぃ！」
「一体何がそんなに悔しいんだい、美樹さやか？」
「だって、だって杏子がぁ！」
「とりあえずボクの尻尾を引っ張るのは止めてくれないかな？」
杏子との情事が終わった後。朝になって家に居ないのは家族に怪しまれるから、と杏子に自室まで送り届けてもらって。あたしはキュゥべぇの胴体と尻尾を掴んで、悔しさに任せて思いっきり引っ張っていた。
「まったく、人間の考えることは訳がわからないよ。悔しい理由も説明せずに、八つ当たりでボクの体を破損させようなんて」
「だって杏子のヤツ！　っくぅー！　思い出しただけでも悔しくてたまんない！」
悔しくてたまらない。だって。そう、杏子はいつだって。
「なんで杏子が攻めで、あたしが受けなのぉー!!」

……本番のとき、杏子はいつだってそうだった。
付き合い始めて、そういう関係を持つまでの間は、ずっとあたしが杏子を引っ張って来た。と思う。なにせ杏子は世間知らずだし、あたしのことを好きだと言っておきつつ、デートひとつ誘って来なかった。あまりの煮え切らなさにあたしの方が業を煮やしたくらいだ。
だから、杏子の泊まり先のホテルに遊びに行ったとき、ちょっと、良いかなーって雰囲気になったときに、杏子の方から切り出して手を出してくれたから、やれば出来るじゃん、って嬉しくなったのも確か。
でも。……でも！
ベッドの上では、いつも主導権は杏子にあった。
あたしは何もできないまま、杏子に耳たぶを甘噛みされれば小さい悲鳴を上げてしまうし、首筋を舐め上げられれば甘い声が出てしまうし、鎖骨に指を這わせられれば仰け反ってしまうし、お腹を撫でられればジュンとしちゃうし……前戯だけでこの有様。
胸を揉まれれば声が止まらないし、乳首を吸われれば、あたしの中から何

か出て行っちゃうんじゃないかというほど気持ちよかったし、お互いの気持ちいい場所を合わせたら、このままホントに死んじゃうんじゃないかって思うほどで、実際に意識が飛んでた。

悔しいことに、杏子はエッチのときは必ず攻め。しかも無茶苦茶上手い。これが余計に腹立たしい。負けず嫌いなあたしの性格もあって、夜の主導権を杏子から奪いたかった。

だから今夜こそは！　……って思ってたのに……！

相変わらず杏子にのしかかられて！　杏子にイかされて！　しかも

「初めて一緒にイけたな」

なんて嬉しそうに言われてあたしも思わず頷いちゃったし！

「そういうことなら早く言ってくれたら良かったじゃないか」

「⁉　言ったって何を！　あたし何も言ってないわよ！」

「テレパシーで思考がだだ漏れだったよ。気持ち良かったけれど悔しい、って」

「ぬぁ――――――！」

恥ずかし過ぎて死にたい。今だったら魔女にもなれる気がする。

「よりにもよって人間でもない、感情もわからないヤツにあたしの恥ずかしい悩み聞かれたなんて‼」

あたしは布団を頭から被って、ベッドの中で丸くなった。それでもしつこく、キュゥべぇは話しかけてくる。テレパシーだから布団でくぐもったりしない。クリアな音質が恨めしい。

「忘れないで欲しいけど、ボクたちインキュベーターは遥か昔からキミ達人類と共存して来たんだ。キミ達くらいの年頃の人間のことなら、大体わかってるさ」

「……だから何だって言うのよ」

「美樹さやか。キミは俗に言う『攻め』のポジションに立ちたいんだろう？だったら覿面な方法がある。同じような悩みを抱えていた過去の魔法少女たちが編み出し、実行して、そしてその悩みを解決して来た方法が」

その言葉に跳ね起きた。同じような悩みを解決して来た覿面な方法？

「教えて！」

首をふん捕まえられたキュゥべぇは、苦しそうに言った。

「男性器を生やせば良いよ」

しばらく何も言えず、

「……へ？」

結構な時間が経ってから、やっと出て来た言葉はそれだった。

「多くの男女関係において、ボクが知識として知っている限りでは男性の方が攻めだとされている。それをヒントに、あるとき、男性器を自分に作った魔法少女がいたんだ。その魔法少女も、他の魔法少女と肉体関係を持っていてね。自分が劣勢であることに悩んでいたんだけれど、それを機に悩みは解消したらしい。それ以来、同じように悩む魔法少女にこのアドバイスをしてきたけれど、今のところ八十パーセントはそれで解決しているよ」

「……残りの二十パーセントは？」

「パターンとしては大きく二つ。生やしても関係が変わらなかったか、気持ち悪がられて破局したかのどちらかだ」

「うげぇ……リアルな内訳……」
それでも成功率八割。賭けてみるには分の悪くない賭けだと思う。でも……男の人のアレを自分につけるって気持ち悪いなぁ……
あたしが腕を組んで眉根を寄せていると、キュウべぇは続けて言った。
「まあ、個人が使える魔法の種類によっては実行できない手段ではあるからね。さやかは運が良い方なんじゃないかな。物の速度を加減したり、未来を視たり、時を止めるような魔法では実現できないんだよ。でも、美樹さやか。キミなら、この方法を実現できる。どうする？　やってみるかい？」
正直なところ、気持ち悪いっていう嫌悪感に近いものが先立っていた。けど、今のキュウべぇの言葉に気持ちがぐらついたのを感じる。私なら、出来る？
「体の組織を再生する方法を応用して、新しい体組織を作れば良いのさ。強力な回復魔法の使い手だから出来る芸当だよ」
なるほど、そういうことなら出来るかも知れない。
ちょっと想像してみる。ベッドの上であたしが杏子を喘がせているところを。
切羽詰まった杏子が、必死にあたしにおねだりするのだ。
『さやかぁ……もうダメ、アタシ、アタシっ……』
そんな杏子の耳元に、あたしは低い声で優しく囁きかける。
『良いよ、一緒にイこう、杏子……』
『ふあぁん……しゃやかあぁぁ！』
そうして果てる杏子。背中が弓なりに反れて、全身がビクン、ビクンと痙攣していて、半開きになった口の端から涎が垂れている……
やばい、可愛いかも知れない。ニヤニヤが止まらない。これは是非一度、生で拝んでみたいと思う。あたしは腹をくくった。
「決めた。やる。やってやろうじゃない!!」

決行は翌日の夜と決めていた。杏子が泊まっているホテルの部屋の前で、あたしはこの後の段取りを確認しながら息を整える。それから、両の頬を軽く叩いて気合いを入れた。小気味の良い音が小さく響く。
「よし」
意を決して、あたしは扉を開け放った。
「杏子ぉー！　今日こそは、このさやかちゃんがあんたをアンアン言わせちゃうんですからねー、杏子(あんこ)だけに！」
「誰があんこだ!!」
クワッと目を開いて、ホテルの自室で寝転がっていた杏子が飛び起きて文句を飛ばして来た。あたしは鞄をその辺に放り出して、突っかかって来た杏子をベッドに押し倒す。
「さやかっ、なにす……」
初めは威勢の良かった言葉が尻すぼみになっていた。眼前に大写しになっている杏子の瞳には、若干の戸惑いと怯えの色が浮かんでいる。あたしのいつもと違う剣幕に押されたのだろう。その様子に、何とも言えない嬉しさが沸き起こってくる。やっぱ、あたしのだわ。
わざと低い声で言ってやる。
「覚悟しなさい、杏子……」
「ど、どうしちゃったんだよ、さやかぁ……！」
「あーら、怖がることなんて無いのよ……なぜならー……」
「な、なんで……？」

泣きそうな顔と声で杏子が問う。ダメだ、怯える杏子とか可笑し過ぎるって……笑っちゃいそう。
「今日はさやかちゃんがリードしちゃうからなのだ！　覚悟せい！」
「ぎゃー！」
そうしてあたしは杏子を引ん剥いた。パーカーのファスナーを素早く下ろして袖を引っ張り、下のタンクトップを剥けば、そこには可愛い双丘が。ホットパンツをずり下ろして、歳の割には幼く見える白いショーツを剥げば、昨晩もあたしを攻めたてた秘裂が。瞬く間に真っ裸にされた杏子は、顔を真っ赤にして、胸と股間を手と腕で覆い隠した。
「さっ、さやか何すんだよ……！」
「いやー、杏子ちゃんは可愛いですなぁ！　杏子の生まれたままの姿見てたら、あたしもムラムラしてきちゃったよ」
「さやかがオヤジになってるぅ……！」
涙目になる杏子。やっぱ、超可愛い。襲いたい。もう襲ってるけど。
あたしも着ている物を上だけ脱ぎ捨てて、杏子に改めて覆い被さる。
「杏子の可愛い顔、いっぱい見たいなー」
耳をくすぐるような小さな声で、杏子の耳元でそれを囁く。杏子が小さくピクンと震えた。
それから、耳たぶの付け根、普段は髪の毛に隠れているところを一舐め。
「きゃうん！」
今度こそ杏子の甘い声が聞こえて来て、あたしの中に嗜虐の欲びが広がる。背筋がゾクゾクする。自然と顔がにやけてしまう。これも、用意したアレの影響で気が大きくなってたりするからなんだろうか。
ちょっと、息が荒くなって来た。あたしの息が。そして、杏子の息も。
耳たぶの裏を舐めたり、耳を甘噛みしたりしながら、手は杏子の胸に。気が早いことに、すでに頂きは固く尖っていた。
「あーら、もう感じちゃってるんだ」
「だってぇ、さやかが……キャン！」
耳を口に含んだら、また高い声が上がる。
「えー、さやかちゃんよく聞こえなーい」
「しゃやかのいじわるぅ……！」
乳輪の外周を、そろーりそろりと指でなぞる。あたしが杏子にやられて、ゾクゾク来た攻め方だ。案の定、杏子も、
「んんんっ……！」
背中をベッドから若干浮かしながら、唇を噛むようにして耐えている。
耳から口を離して、今度は杏子の胸に吸い付くことにした。まずは正中線、胸のど真ん中。チュッと口を付けて、薄いキスマークを付ける。次におっぱい。山を登るように、皮膚の下に肋骨が感じられるような麓から、柔らかい足場を踏みしめて五合目を通過、固くなった山頂の岩へと登り詰める。チロリと、乳首を舌でかすめた。
「くんっ！」
犬の鳴き声のような声を出して、杏子の腰が跳ねた。良い感じ。
杏子の、大きくもなく、小さくもないサイズのおっぱいへとかぶりついて、力任せに吸い上げた。ちょっとだけ塩の味がする。
「やっ、ば、ばか、吸うなって……!!」
「むふふー、杏子の味がしておいしいよ」
「なんだよそれっ……」
杏子が真っ赤な顔をして、顔を見せないかのように横を向いた。恥ずかしがっちゃってさー。
杏子の胸から顔を離して、お腹を指先でなぞる。おへそのそばを掠めると、

杏子は「きゃっ」と、柄にない声を出した。
「こっちの味はどうなってんの？」
うっすらとした茂みの下、杏子の女の子な部分は、すでに鶏に濡れていた。割れ目の下に垂れた粘り気のある液体を、舌先で舐めとる。
「そ、そんなとこ舐めるなよっ……」
「あたしがそう言っても、いつもあんたここ舐めてくるじゃない」
「そ、そうじゃなくて……その……」
消え入りそうな声で杏子が言う。
「お、お尻の穴に近いから、汚いだろっ……」
あたしは、ぷっと吹き出した。
「それもいつものあたしの台詞じゃん」
それでも何か言いたそうにしてる杏子を無視して、割れ目を下から上に指でなぞり上げる。指先にべっとりと、杏子の中から出てきた液が付く。
「もうこんなに濡れてる。そんなに気持ちよかったの？」
杏子の目の前で、濡れた指を見せびらかす。親指と人差し指をくっつけて離したら、ねちゃ、って音がして糸を引いた。
ますます京子が顔を赤くして、蚊の鳴くような声を出した。
「……や……だか……」
「んー？　もうちょっとはっきり言ってくれないと、さやかちゃん聞こえないぞー？」
「さやか、だから……」
「さやかちゃんだから、なんですってー？」
「さやかだから、気持ち良かった……っ」
思わずあたしの顔が赤くなった。もっと聞きたくなって、ついつい言ってしまう。
「も、もう一回！」
杏子はとうとう目を固く瞑って、ヤケになったように大声を出した。
「さやかが攻めてくれたから嬉しくて、しかも上手かったから気持ちよくて、こんなになっちゃったんだってば……！」
キュンとなった。なんか、矢で胸を射抜かれたような、そんな感じ。
杏子って、こんなに可愛かったんだ。
そう思ったら、もう自分を止められなかった。目覚めた心が走り出しちゃってますね、あたし！
ショーツを脱ぎ捨て、スカートを捲る。充血して熱くなった肉棒が、準備万端とばかりにいきり立っていた。
それを見た杏子が上体を起こして、驚きの声をあげる。
「さ、さやか……それ」
「ふふーん、どうよ！　これで今日こそあんたを喘がせてやるんだからね！」
しかし、杏子は驚いていても怯えることは無く、いきり立つあたしのアレを指差して尋ねてきた。
「そ、それって……子供、作れたりするのか？」
そう言えば、これ作るときにキュウべぇあたしに見せたこれの組成に関する情報の中に、あたしの遺伝子を複製して半分にする方法があった気がする。意味がほとんどわからなかったから、言われるままに作ってて覚えてなかった。確か、保健の授業で何かそういうことは習った気がするけど……
「多分できるんじゃない？」
「ホントか!?」
途端に杏子が目を輝かせた。そう言うなり、杏子がもう一度寝そべって、
「じゃ、じゃあ……は、早く来いよ、さやか」

脚を広げて、その……女の子の部分を両手で広げる。テラテラと光る、キレイなピンク色の襞が幾重にも続くその真ん中に仄暗い穴が空いていて、薄っすらと、イボにも似たような凸凹が見えた。
心臓が早鐘を打つ。どこかから、ゴクリ、と生唾を飲む音がした。
杏子に覆いかぶさるあたし。
「か、観念しなさいよ……！」
「ああ、来いよ……」
杏子が手でアレを掴む。「結構熱いのな……」と言いながら、ソレの先っぽを穴へと導いた。
「い、行くよ、杏子」
「そ、そんなに何度も言わせるなよ……」
若干上ずった声で聞くと、恥ずかしそうな声が帰ってくる。
いざ。ゆっくりと歩みを進める。
処女膜は無い。前に杏子とあたしで双頭ディルドーを使ったときに破ってしまった。こんな方法があるなら、とっておくんだったかな、初めては。
ゆっくり、ゆっくり。
亀頭が杏子の中に沈む。くすぐったいのを何千倍にもしたような触感が、脊髄を通って脳みそまで駆け抜けた。
ゆっくり、ゆっくり。
竿の半分くらいが入った。杏子の中はかなり暖かい。少し動くだけで、デコボコがいちいちあたしの性感を刺激する。女の子の身体って、やっぱりコレを喜ばせられるようにできてるんだ。そう思った。なら、コレは女の子を喜ばせられるようにできてるのかな？
ゆっくり、ゆっくり。
「全部入ったよ」
「あ、ああ、わかるよ……」
「痛くない？大丈夫？」
「痛くないよ。むしろ気持ち良いさ。でも、圧迫されてる感じがすごい。腹の中、全部さやかで埋まっちゃったみたいだ」
そう言って、杏子はニカリと笑う。
杏子の中はとてもきつかった。握られてるのとは全く違う圧力で、全方向から柔らかく包み込んでくる。かかる力も杏子の鼓動に合わせて、ちょっとキツくなったり、緩くなったり。ただ入れただけで動かしてもいないのに、気を許したらイっちゃいそうだった。
「動かして良い？」
「いつでも」
許可をもらって腰を引く。杏子から出た潤滑液のおかげで、つるりと滑る。亀頭のエラが張った部分が凸凹に擦れて、思わず限界を迎えそうになる。
半分くらいを外に出す。すると、杏子が心配そうに声をかけてきた。
「痛いのか？」
「痛くないけど……何で？」
「なんか、苦しそうな顔してるからさ」
知らない間に顔が強張っていたのに気づく。
「大丈夫。気持ち良すぎて、我慢するのが大変なだけだから」
「そっか。さやかが気持ち良いって言ってくれて、良かった」
二ヘラ、と杏子が笑った。
ドキンとする。愛おしい。そんな気持ちがあたしを一杯にした。
また肉棒を中に。今度は勢い良く打ちつける。
「あっ」
杏子の声が上がる。これは感じてるときの声だ。

もう一度引く。また打ちつける。今度のストロークは長く。
「あんっ」
もう一回。
「あぁっ」
もう一回！
「あん！」
ここまで来たら、もう腰が止まらなかった。
神経の束を焼き切りそうな勢いで、快感がアレを焼いていく。
杏子が悦んでる。幸せで一杯になる。
その二つだけを感じながら、あたしはさながら獣のように腰を振った。
「ああっ、あんっ、あぅ、あっ、はっ、あっ」
「はぁっ、はっ、ん、ぁあ、はぁ、はっ」
パンパンパンという、あたしと杏子の肉がぶつかる音と、杏子の喘ぎ声、それにあたしの荒い呼吸音が重なって、妙なアンサンブルを奏でる。肉欲の音、快感の音、幸せの音。
もう、いつ、あたしの中で何かが爆発してもおかしくなかった。でも、こんな状況を長く続けていたかったからだろうか。腰を振りながら、必死になってアソコら辺に力を入れて、出さないようにこらえているあたしが居た。
「さやっ、さやかっ！」
「きょうこぉ、きょっ、こ！」
呼ばれた気がした。呼び返した気がした。自分が何をしてるのか、どうして気持ちいいのか、もうわからなくなりつつある。
「きょうこっ、きもちいよっ、がまんできないよぉ」
唸るような声が、あたしの喉を震わせていた。
杏子があたしの背中に手を回して、抱き寄せた。腰を浮かせにくくなったけど、それでも止まりはしない。
「嬉しい！　超嬉しいよ、さやか！」
「ふぇ？」
杏子の顔に目を向ける。そしてそこで、あたしは珍しいものを見た。
「そこまで真剣にアタシとの今後を考えててくれたんだな……！　良いよ、中に出せよ……二人だけじゃ、寂しいもんな……!!」
杏子が、目尻に涙を浮かべていた。嬉しそうに、心の底からの柔らかい笑顔を浮かべて、それでも顔は熱に浮かされたように赤くて。
そんな杏子の顔を見て、冷や水を掛けられたようにあたしの頭が冷めた。
「だ、だめっ!!」
とっさに魔法を使って、体からアレを消す。杏子の温もりが無くなって、いっぺんに虚無感が襲い来る。
さっきとは違う、パン、という音が一回響いて、そこでようやく、あたしの腰は止まった。

「なんで……止めたんだよ」
悲しそうな顔をして、杏子が言った。
続けられるはずが無かった。だって、あたしが生やしたアレは本物で、ともすれば子供だって作れちゃうようなものなのだ。年頃の女の子のお腹の中にばらまけば、そりゃ、子供だってできるだろう。遅まきながら、杏子の言葉でその事実に気付いた。中学生くらいの歳の女の子が赤ちゃん産むだなんて、そんなの無理だ。生物としてはできるかも知れないけど、そんなの社会が許さない。

それでも、そんなこと杏子に言えなかった。元はと言えばあたしが「杏子から夜の主導権を奪いたい」だなんて不純極まりない理由で始めたことだし、それに知識がいささか足りてなかったとは言え避妊具は用意するべきだったのだ。

「……ごめん」

やっと出た言葉はそれだけだった。杏子が苦笑いをする。

「なんで謝るんだよ」

「だって……あたし……ごめん」

「だから、どうして」

「ごめん」

俯いたままそれしか言わないあたしに、杏子は頭をボリボリと引っ掻きながら背を向けて。それからこちらを振り返ろうとしてまた背を向けて、言った。

「アタシこそ、ごめんな」

あんたこそなんで謝るの。そう言おうとして、遮られる。

「さやかとの愛が形になるんだって思ったら、嬉しくてさ。先のことなんにも考えずに、『子供作ろう』みたいなこと言って。ははっ、作ったところで、育てられるかってんだよな。今から十月十日経ったところで、さやかは中学生のままだし、アタシも同じような歳だもん」

杏子がこっちを向いた。いつもはつり目気味な目尻が下がって見える。

「だから、ごめん。さやかに、多分辛いこととか考えさせちゃったと思う。さやかは優しいからさ」

嗚咽が込み上げてくる。

「……なんでよ」

「さやか?」

「なんであんたはそんな優しいのよぉ……!」

杏子の胸に倒れ込む。「おっと」と言いながら、杏子は倒れずに、あたしをしっかりと受け止めた。あたしより薄いはずのその胸は、そのくせ、今はあたしの胸より柔らかく感じた。

「……ありがと」

「こっちの台詞だよ」

ポンと頭に手が置かれる。頭を撫でられるがまま、あたしは鼻をすすって涙を流した。

「あっ、はぁっ、んっ、んっ……」

杏子の上で、あたしの腰がリズミカルに跳ねる。腰を落とす度に杏子が一番奥までぶつかって、体の奥まで杏子を受け入れてるんだと考えると、お腹からせり上がるような幸せでいっぱいになる。

「んっ……良いよ、とっても気持ちいいよ、さやか」

「あ、あたしも……!」

杏子から生える剛直が、真下からあたしを貫いていた。騎乗位というやつだ。杏子が、やってみたい、と言い出したからやってみてるんだけど……ホントに、杏子はこんな知識をどこで仕入れて来たんだろう。

「さやかっ、そろそろ……!」

杏子が切羽詰まった声をあげる。

「えっ、ちょ、待ってよ杏子! あたしまだイけそうじゃ……」

「もうダメ、出る……!」

「ふぁん!?」

杏子が思い切り、あたしに腰を打ち付けた。同時に杏子の剛直がビクンと震えて、あたしの体温とは違う暖かさの何かが、あたしの中に流れ込んで来た。あたしの中まで、全部杏子に染まっちゃったんだ。そう思うと、幸せな気分になれるんだけれど……

「あ……」

それは長く続かない。すぐに、杏子が放った子種とあたしの中を埋めていたものは消えてなくなってしまった。

そう。これは全て、杏子の幻惑の魔法を使った幻。

あたしがアレを生やして杏子とプレイしてからというもの、杏子は何かとこういうプレイをしたがるようになった。でも。

「杏子、早過ぎ……」

「だ、だって、さやかの中気持ちよ過ぎるから……」

幻の中だというのに杏子は早漏で、しかもイっちゃった後は集中力が切れて、魔法が解けてしまうのだった。おかげで、あたしは最後まで楽しめない。最近、ムラムラは溜まってばかりだった。

「だったら」

だからだろうか。

杏子に覆い被さるようにして、顔を近づける。

「責任とって、もう一ラウンド。今度こそ、あたしを満足させてよね」

「おう」

自然と、杏子に対してこういう態度を取れるようになって来た。

ちょっと疲れたような顔で、杏子はニヤッと笑って返事をする。

私の方から奪った杏子の唇は、それでも変わらない、幸せの味がした。

今回初めて生えてるさやかを書きました。
まあやる事は変わりませんが、もっとさやかは攻めてもいいのよ。

謎のザコ

●http://www.pixiv.net/member.php?id=421658

お誘いいただきありがとうございました。はじめまして、足田と申します。
twitterでガタッと反応したときは、まさか杏さやふたなり合同を拝める日を迎え、
さらには自分が参加するとは予想していなかったので……。今も手が震えております。
杏子とさやかは、年齢はおそらく近いでしょうが、今まで過ごしてきた環境が全く異なり、
考え方も食い違っているでしょう。
そのため色々衝突があり、また、特に杏子のさやかに対する不安は大きいのではないかと思っています。
普通の生活をするさやかには、普通の恋愛をする機会があり、かつてもありました。
そのあたりの障害を二人でうまく乗り越えてくれたらいいな、と考えつつうんまい棒を起動。
あと個人的に、さやかのいやらしさは味をしめたら日に日に強くなっていくと思うので、
それに対して杏子があわあわしていたら大変おいしいです。頑張れ杏子、負けるな杏子。
しかし杏子は学習能力が高そうなので、きっとすぐに追いついてくれるでしょう。
……話が長くなりそうなのでこのへんで。
杏さやがふたなりという方法で体だけでなく心も繋がってくれたら、と思います。

足田

●http://www.pixiv.net/member.php?id=175238

素晴らしい企画にお誘いいただいてありがとうございます！
こんなに豪華な執筆陣に混ぜていただいて、光栄の極みです！！
杏さや良いですよね……可愛いですよね……！
こんなに可愛い二人に生えちゃったら……きっと美味しいですよね！
とか言いつつ、実はそんなにhtnrもののお話は考えたことがありませんでした。
なのでがっつり考えてみた結果がこれです。いかがでしたでしょうか。

底抜けに優しい杏子ってホントにイケメンだと思うのです。
めんどくさいさやかってホントに可愛いと思うのです。
この二人がイチャコラしてくれたら、それはとっても微笑ましいな、って！

鍵屋

●浜辺の散歩道　http://www.pixiv.net/member.php?id=154806

十九

そんなあいつの溜まった熱を どうにかしてやれるのは
あたししか いないわけで
ぎゅっ

杏子に ありえないモノが 生えました
にょきっ
キュゥべぇは 魔法少女にはよくある事だ の一点張りで
良くわからぬまま 杏子はいろいろ 辛いみたいで

てか他の子になんて 絶対させたくないし…っ
むぎゅ
……さやか
えっ何？
あのさ、やっぱ 無理すんなって あたしなら大丈夫だから
だっ
大丈夫って…
ぜっ全然 大丈夫じゃないじゃん
かあっ

こんなことでさやかに無理させたくないし

はは

……

むっ

無理無理って

あたしだって子供じゃないんだからちゃんとわかってるよっ

ちゃんとできるから…っ

ばっ

うわっ

ちょっ…さやかっ

カチャ

……

……わぁ

かぁあぁあぁ

あぁあぁ

…これ、杏子の…
これ…だよね…え…っ…
こ、こんなに大きいもんな
小さいころにお父さんの
っきりだし…てかあたしは
これを手で擦ったり…する
と舐めたり…するんだ
よね…うわぁ緊張
するやばいや
やばい

はは…

気持ち悪いだろ？
えっ
だからいい。無理しなくていいって
ばかっ
ぎゅっ
きっ気持ち悪いわけない…
杏子のだもん気持ち悪いわけないじゃん
そんなこと言わないで
かあ
…
コクッ
無理なんかじゃない
あたしだって杏子の役にたちたいんだから
ちゅっ
あたしを頼ってよ…
じゃ、するから…痛かったりしたら言ってね
…ん…

すっ

こすっ

……

きょ、杏子の触っちゃった…

さわ

なんかぬるぬるしてきた…

くにゅっ

くにゅっ

しゅっ

しゅっ

あ、ちょっと滑りやすくなったかも…

くにゅっ

くにゅっ

ね、杏子…いい？あたしちゃんとできてる？

ビクッ

ビクッ

……う、うん…

ただでさえやばいのに

こんな一生懸命されて

こんな顔…

はぁ

みせられたら…っ

はぁ

は…っ ちょっちょっと 待ってさやか… はぁ

ぷるっ

へっえっ何っ あたし何か…… 夢中になりすぎて…

や、そうじゃなくて… そうじゃなくて ですね…

もういきそう だから…っ

ぬと

あっ！へ、へぇー あー

うん…

かわ

そっか…

で…さ…

ぎゅっ

最後はやっぱり

さやかとしたい…

かあっ

えええっ

それって挿れ…っ

まっ待ってまだ心の準備が…っ！

あたし達まだ中学生だし!!

わっ

わっ

わかってる！

それにあたしだってさやかのこと…

傷つけたくないし…

でも…

こくん

……

こ…

擦ったりとか…

するだけなら…

ぶんぶん

？

…ん
そう…
こうやって…

わっわっ
さ、さやか…っ

す…さやかってたまに
すっごい大胆なことするよな…

かぁぁ

ばっバカッ！
あたしだって恥ずかしいよ…

…っていうか
あたしがしたいんじゃなくて

…

かぁ

杏子の為に
してるんだからね！

嬉しい

きゅっ

うわぁっ

あっあっ
あたってる…！

ちゅ

ちょっ
杏子…！

きょ…
んっ

ちゅっ

ん～っ

あ

ちゅっ

はぁっ

ちゅ

はぁ…

ちゅっ

ぷくっ

は

む

とろん…

さやか…

きょ…こ…

はぁ

な、なんでいきなり
がっついたのよ…

モーっ

だ、だってさ…

とくん

今日まだキスしてなかったし

そ…だけど…

じゃ、いくよ…

ヒロ…

う、うん…

ぬるん

ン…っ

っ…これでいいのか…？

ビクッ

う、うん…っ
そうやってこす…

ひゃっ

な、なにこれ…っ
杏子の…すごい擦れて…っ

やば…

ぶるっ

ビクッ

ビクッ

さやかの…っ
すっごくぬるぬるしてる…

ぐちゅっ

ぬちゅっ

もしかして
あたしの…っ
触ってる時から

びくっ

濡れちゃってた…？

そっ

じゅわっ

そんなのっ
わっわかんないよぉ…

ぐちゅっ
あっ♡
あるっ
こっこれ…っ
きょうこの…っ
ぐぐっ
ぐぐっ
あたしのなかっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ
はいっちゃ…！
きゅっ
ああっ♡♡
ビクッ
ぐちゅっ
ぬるっ
はあ
はあ
さやかの太もも…
すご…気持ち良い…っ
はあ
ぐぐっ
ぐぐっ
きゅっ
さやか…っ
足閉じるよ…っ！
ばっ
えっ…きゃっ

あ♡
やっ♡
ずっ
ずりっ
や、やば…っ

は、あっ
さやかっ！
な…に…
はぁ、
ひくっ
あっ
ぎゅっ♡
も、もうイッ…♡
あっ♡

いいっ♡
ぐちゅっ
ひぎっ♡
ぎくっ
あっ♡
はあっ♡

はーっ

ぼーっ
さ…さや…
はぁ、
むくり
……

…ひ…っ
ひとりでいった…！

くいっ

だっ！だって
気持ちよかったから…っ！
ごめんって

もぐ～

ぽすっ

むぐっ

…杏子ひとりで
いっちゃうから

かあ～

すっごく中途半端だよ…

すみません！
次はちゃんと
するから…！
もういっかい…

はぁっ

きょ…杏子が
どうしてもって
言うんなら…
ごたえたよ

もじ
もじ

おしまい

ざわめき　●ざわめきじゃんぼ　http://hm1128.blog121.fc2.com/

ひのいち

くそっ
うごけねー！

佐倉さん…！

残念！

無事でした!!

3人共！魔女が逃げたよ！
！
まだそう遠くには行ってないだろう
すぐに後を追おう！
任せて！
さっきの攻撃も『イタチの最後っ屁』ってやつ？
相当弱ってるんじゃない？

トッ…

そうね
後は私と巴マミで
始末するわ

もー何して
たんだよー

ちょっとぉ
遅れて来ておいて
オイシイ所だけ
持って行こう
ってのの？

ほむら

遅れた事は
謝るわ
ごめんなさい

だけど
自分自身の事だもの
気づいてない訳じゃ
ないでしょう？

魔女を倒してもそれは
治るものじゃないの
害はないけれど
ほっとくと後の生活に
支障が出るわよ

……

そう、お見通し
なワケ？

だったらほむら
どうすればいいか
知ってるの？

対処の仕方は
佐倉杏子に説明
したわ

え。
ちょっと！

それじゃあ
行きましょう
巴マミ

スタ

スタ

……

え…えぇ…

……

悪い…
本当ならあたしが
そうなる筈だった
のに…

そんな事

全然気にして
ないよ

こうなるって
わかってても
同じ(杏子)コト(を助けて)してたし

それにさぁ
もし杏子が
こうなったと
しても

あたしは
対処の仕方間いて
ここに残るよ

杏子が
そう…

してくれた
ようにね

——で、どうすれば治るって？

さっさと治して合流しちゃいましょーか

それなんだけどさやか…

え

えっち…

するの？

inホテル

昨日したばっかだけど別にいいだろ

今更どーした

そ、そーだけど!! いいけど!! でも!!

少女確認中…

う…うわぁ…ホントに生えちゃってるよ…

まじ

まじ

ていうかこんなんだったっけ？こんなのついてたらお嫁行けないわぁ…

小さいときに恭介の見ちゃった事あったケドもっとウインナーみたいなのだったような…

さーやかトイレ長い

少女待機中…

——あ…
アレ…を…

杏子に見られちゃうの…？

……

…杏子さっきからチラチラと

何…見…

…あ…

ばかあ

えっち!!!

イテェ！

どっちがだよ!!

あたしそんなじゃないもん！

さやか興奮してんじゃん！

ウルサイ!!

つーか…！早くしないとずっとそのままになるかもしんないんだぞ！

さっさと治すんだろ！こんなコトしてる場合じゃないだろさやか！

だって…

だって…

こんな姿…

あたし…杏子に見られたくないよぉ…

わかった
さやか

見ないで
するから

それなら
いいかい？

……

う

うん…

ごめんね…
ありがと

あたしさ

さやかが
守ってくれて

さやかが
無事で

さやかが
頼ってくれて

ト…ン…

嬉しいよ

!!

杏…

子

そっ…

さやかは女の子だもんな

なで

なで

ピッ…

こんなの…つらいよな…

大丈夫あたしが絶対なんとかしてやる

うん

どうなっても一緒に居てやるよ、さやか

ん…

くちゅ

くちゅ

う…

こうするとさ
こす
こす
っ！
気持ち良くなってくるだろ？
我慢しなくていいからな…
う…
うん…っ
あっ
こしゅっ
こしゅっ

ひっ
はっ
はっ
な…何か出そう…
そしたら
一気に溜まってるのを出せばいいんだ
ぬちゅ
ぬちゅ
ぬりゅ
ん…
ちゅっ
ちゅっ
あ♡
あっ
ぎゅっ
こしゅっ
こしゅっ
ぎゅっ
ぱっ
ぱっ

んっ…レ

ふぅ…

ん…レ

ふぅ…

ビクッ

ビクッ

杏…子…服…

ごめ…ん

いーっていーって！これくら…

ふー

ふー

い

ぬとぉ

あ…

わるい…

も…もういいよ…最初は恥かしかったケド…

こんなの見ないでするなんてムリだしさ…

…で…

次はどうすればいいの？

——へ？

…でも…

もしさ
あたしが
そうなってたら

さやかは
どうする？

杏子…
いいの…？

そんなコト
したら…
その…

そんなの!!
決まってる
じゃん!!

あたしが
やらなくて
誰がやるって
いうの！

そういう事だよ
さやか

あたしさ…
さやかがそう
なってから
何でだろうな…

こんな事
思っちゃ
いけないのに

嬉しくてさ

杏子…

今までさやかとは
何度も身体を
重ねてきたケド

あたしが
女じゃなかったら

もっとさやかに
いいコトして
やれたのにって
思ってた

でも、さやかが
そうなって…
あたしを頼って
くれて

嬉しかった…
今のさやかを
あたしは女だから
受け止めてやれる

そう…
思ったんだ
だから…

あたしは
さやかを受け入れて

さやかと
一緒になりたい

…杏子…っ

ごめ…
ありがと

さやか…

うん！

ギシ…

少しでも
痛くない
ように…

いっぱい
濡らして
あげるね

あたしは
ちゃんと杏子の
女の子の部分
大好きだよ…

だって
こんなに
可愛いんだもん…

ん♡

キュン♡
キュン♡

あ♡

ちゅ♡
ちゅ♡

杏子

好き

はっ

ぺろ

大好き

はっ

あっ

あっ

もう イっちゃった の杏子

すごい トロトロ だよ…

ちゅっ ちゅっ

はぁ

はぁ…

さやか…ぁ

杏子…

大丈夫？

ギシ…

お、おう！

ぴと

こう…？

ぬるんっ

あ、あれ…

ねぇ…

入らないんだけど…

どーすればいーの？

むずかしい

ンなコト言われても

も、もっと下だって…！

さやか同じモンついてンだからわかるだろ！

だって滑るんだもん

こ、ここだよ…もう！

ギャー

ギャー

あ…入りそ…

ぐぬ…

ぷじゅ

ビクッ

ビクッ

うっ…

ごめ…ん…もう出ちゃった…

いやまぁ…嬉しいケドさ…そんなに感じてもらえて…

全く世話が焼けるよなぁ

さやかは！

ん♡

んっ

ギシ

わ…わかんないし初めてなんだもんしょーがないじゃん

はいはいそーだなー

ギシ

ギシ

ぐ…

ぐい

ずぷずぷ

ギ…シ

ピクン

えっちしたけど治らないね…

だったら治るまで付き合うし！

もし治らなくてもあたしがずっと一緒に居てやるし！

い…いいの？

杏子並でてたじゃん…

大丈夫？

あれ位平気だ！

数日後

杏子ぉ

さやかぁ

さやかっ

あ♡

あ♡

杏子ぉ

杏子ぉ

杏子ぉ

ずぷ♡

はっ

はっ

はっ

好きぃ

あ

あ

ずぷ♡

ビュクン♡

トプッ

トプッ

さやかぁ

ぁぁぁぁぁ

レ

レ

レ

レ

はっ

はっ

おしまい。

ぴかち　●えねるぎあ　http://www9.wind.ne.jp/kuusou/

きもおいせり

今日は私に任せてよ!!

やりたいことがあるからっ

えっ

あ、うん…？

どーん

あ

はっ

はぅ

ぴくっ

ちゅっ

ちゅっ

ぺろ

ぺろ

ぺろ

ぺろ

ぺろ

ん

ん

れろっ

とか、言うからっ

任せたらっ

あんっ♡

なにっ

これ…っ

あっ

あたまの中っ

じんじん、する…っ

ぞくっ♡

ぞくっ、ぞくっ

はー、はー

はー

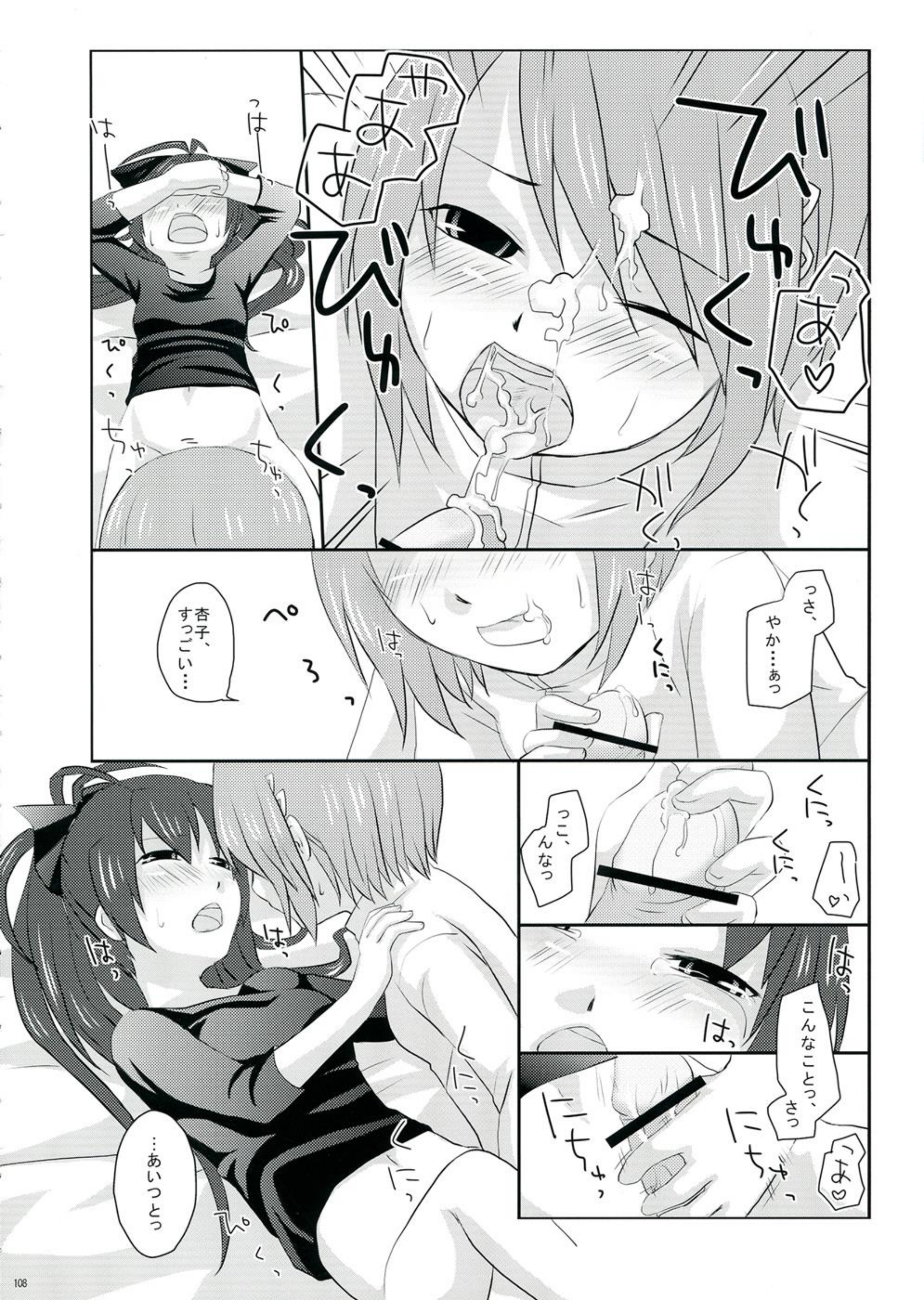
ぞくっ♡

あ♡

は♡

ぎゅ
「あ
ぱ
ぱ
ぱ

ぢゅっ
ちゅう
しゃっ
しゃっ
「あ♡」
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ
あ♡
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅっ


ぶるぶるっ
あぁ♡
ぶるぶるっ
はっ
はっ
ぷっくっ
ちゅっ
ちゅっ
やっ
やか…あっ
つさ、
くにっ
はっ
ぺろっ
杏子、すっごい…
くにっ
くにっ
ー♡
こんなことっ、さっ
にちゃっ
にちゃっ
はっ
はっ
はっ
くにっ
くにっ
ぷっくっ
…あいつっとっ

かっ
上条とさ…っ

…したっ？

……っ

—きになる？

……
…なる

ん

…してないよ

——しょうこ、

みせる…っ

ちゅ

ちゅ

ぱくっ

え…っ

「こ♡」

「え」

ずぶ

ずぶ

ずぶ

ひくっ

ひくっ

「あ♡」

「あ♡あ♡あ♡あ♡」

「ぁ…」
はっ
…ぃい
はっ
ん…
ぎゅっ
ぎゅっ
「あ♡」
あぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ぐぃ
ぐぃ
ぐぃ
ぐぃ
「ん♡」
ぴくっ
「うあっ♡」
ぐぃ
「ぁ♡」

っ…ね、？
はーっ
はーっ
はーっ
ぐぃっ
ぐぃっ
さ、やかっ…！
ばか…っ
無茶、して…っ！
ちゅっ
ちゅっ
だ、って…っ
「♡」

あたし、あげられるもの…っ、

これくらいしか…

ないから…っ

ちゅ

ちゅ

ぎゅ♡

ぎゅ♡

いつか、するなら…っ

だれかと、するなら

杏子がいい…

はぁ♡あぁ♡
ちゅっ
ちゅっ
ぴしっ
杏子と…っ したいっ
ぐぃぐぃ
はぁ♡
あぁ♡
ぱちゅ
はぁ♡
はぁ♡
ずずっ
ずずっ
はぁ♡
さやか…っ
はぁ♡
ぐぃぐぃ
杏、子っ
あぁ♡
ぐぃぐぃ
ぐぃぐぃ
あぁ♡
あぁ♡
ぐぃぐぃ
ぐぃぐぃ
ぐぃぐぃ

すいません
すいません
すいません
あっ
あっ♡
あっ♡
あっ♡
はーっ
はーっ
はーっ
がくっ
がくっ
がくっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
あっ♡
あっ♡
あっ♡
あっ
あっ
あっ
がくっ
がくっ
がくっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
がくっ
がくっ
がくっ
じゅぽっ
じゅぽっ
じゅぽっ
じゅぽっ
じゅぽっ
じゅぽっ
あっ♡
あっ♡
あっ♡

はぁ
ぐぽっ
あぁ
あぁ
ぐぽっ
ぐぽっ
あぁ
はぁはぁ
はぁはぁ
はぁは

はー、
は、
はぁ、

…はぁ

……あたし、

杏子のものに

なっちゃった…

はぁ、

…そんな事言われたら…さ

ぞくぞく

駄目だよ

ちゅ

ちゅ

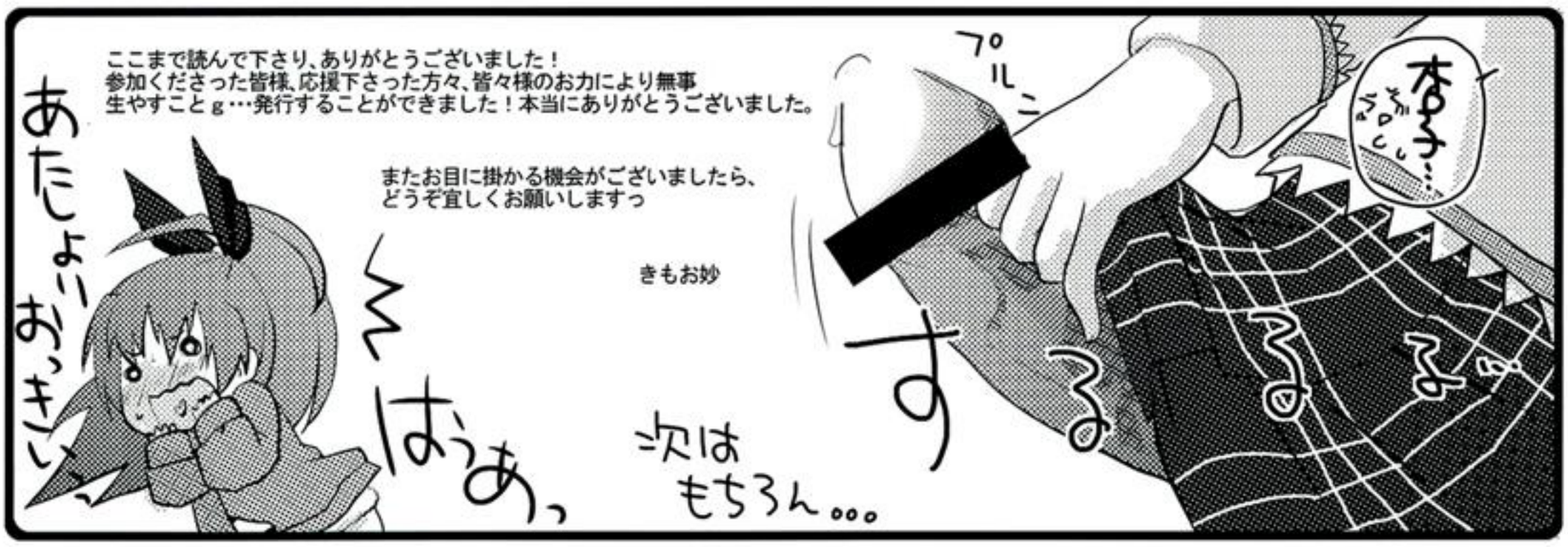
また……っ

ついいいょ

朝まで

しようよ

おわる



きもお妙　●meetsLucky　http://kimootae.blog111.fc2.com/

生えちゃってますねあたし達！

杏さやふたなり合同誌

PUELLA MAGI MADOKA MAGICA
KYOKO&SAYAKA FAN BOOK.

印刷会社	株式会社栄光	2012年4月30日発行
表紙デザイン	carmine	
	clocknote.	http://clocknote.net/
漫画	ぐみちょこ／H'／ほなみ／黒雲鶴／ざわめき／Katzeh／ぴかち／きもお妙	
小説	鍵屋／謎のザコ／足田	
主催	ぴかち	
	えねるぎあ	http://www9.wind.ne.jp/kuusou/
	きもお妙	
	meets Lucky	http://kimootae.blog111.fc2.com/
		ma_ko66hana@yahoo.co.jp